

第8回日本サッカー殿堂掲額者

〔特別選考による掲額者〕

多 和 健 雄

クリストファー・マクドナルド

牛 木 素吉郎

多和 健雄 Takeo TAWA

＜主な掲額理由＞ 1958年改訂の学習指導要領作成に関わり、サッカーの義務教育課程化に貢献。その成果が日本サッカー界の大きな発展につながった。

●1918年10月29日、愛媛県生まれ

兵庫県立第三神戸中学校、東京高等師範学校で選手として活躍。中央大学法学部卒業。中学、高校の教諭を経て、1954年から東京教育大学で教鞭をとり1973年より教授。1978年筑波大学体育専門学群副学群長。

JFAでは1960年より選手強化本部普及部長、東京オリンピック後は普及指導部長、技術委員として、年齢や環境に応じたサッカーを提案し、サッカー文化の普及や指導者養成(コーチ制度の確立)に尽力した。



戦後いち早く、サッカーの教育的、文化的価値を見出し、学校正課体育へのサッカーの導入を提唱し、その原案作りに関与。1958年改訂の学習指導要領改訂において、小学校から高校までの体育の学習内容としてサッカー(小学校では簡易型のサッカー)が採用された。(1962年から小学校から段階的に施行が始まる)。1960年文部省教材等調査研究会の委員に委嘱され、学年に応じた技術習得のための教材研究や指導法の体系化に努めた。また、教職を目指す学生や現場の教員を対象に指導者講習会を実施し、教育現場での適切な指導の実現を図った。サッカーの教育課程への位置づけにより、すべての児童がサッカーを経験できる環境が整備された。基礎的なサッカーの指導が学校体育の中で行われることとなったことは、日本のサッカーが急速に普及し、発展する一つの大きな契機になったといえ、その先鞭をつけた功績は大きい。

また、戦後最も早く海外のサッカー理論を取り入れ、チームでの指導で実践する一方、それを若い世代へと伝授し、戦争で中断され低迷していた日本サッカー界を活性化させた。自ら監督として、東京教育大学を1953年度関東大学リーグ優勝に導いた。

2007年没

クリストファー W・マクドナルド Christopher W. McDonald

＜主な掲額理由＞ イングランドと日本の架け橋となり、日本サッカー界の発展に尽力した。

●1931年12月13日、イングランド ロンドン生まれ

1950年4月に来日。ナショナル金銭登録機株式会社勤務後、1980年より日本ロレックス株式会社代表取締役、同社長、会長を経て2007年に退職。

1992年よりJFA顧問。1993～2008年Jリーグ裁定委員会委員。

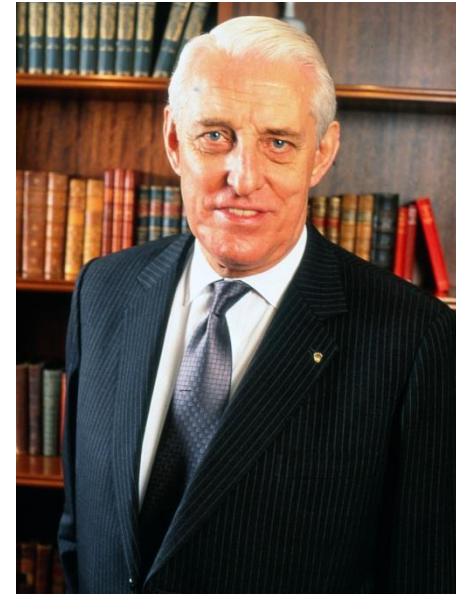
幼少よりサッカーに親しみ、来日後は、YC&AC、TRICKクラブでプレー。主にGKとして活躍し、TRICKクラブでは全国都市対抗選手権に東京代表として出場した。

1958年アジア競技大会(東京)、1964年東京オリンピックでは競技役員を務め、FIFA役員らのリエゾンとして活動、スタンレー・ラウス卿(1961～1974年FIFA会長)とも親交を持ち、FIFAとJFAのパイプ役を務めた。

1960年代後半～70年代にかけて、ミドルセックスワンダラーズ(全英アマチュア選抜クラブ)やアーセナル、マンチェスター・シティ、トッテナム・ホットスパーなどのイングランドリーグ(当時)の強豪クラブの来日をコーディネート。海外遠征が容易ではない時代に親善試合を数多く実現させ、日本代表が世界のサッカーを知る貴重な機会をつくった。

1969年ワンダラーズクラブの2度目の来日を機に、同クラブよりJFAに「ミドルセックスワンダラーズ杯」が贈呈され、1970年からプレゼンターとして高校選手権の優勝校にカップを授与。サッカーを通して道徳心やスポーツマンシップを培うというクラブの精神を伝え、サッカーによる日英交流の架け橋として活動を続けている。

1978年大英勲章第4位受章(O.B.E.)、2009年日英間の文化交流促進と我が国のサッカー界の発展に寄与した功績により、旭日小綬章を受章。



牛木 素吉郎 Sokichiro USHIKI

＜主な掲額理由＞ サッカージャーナリストの草分け。FIFAワールドカップは1970年メキシコ大会から取材し、新聞、雑誌などのメディアを通じて、日本サッカー界への提言を続けている。

●1932年6月12日、新潟県生まれ

新潟県立新潟高校、東京大学文学部社会学科卒業。東大ア式蹴球部主務。東京新聞、読売新聞でスポーツ記者を務め、50年以上にわたってスポーツジャーナリストとして活動。

1970年代半ばまで日本サッカー協会機関誌『サッカー』の編集に携わる一方、『サッカーマガジン』誌(ベースボール・マガジン社)では、1966年の創刊以来40年間にわたって時評を連載して日本のサッカー界のオピニオンリーダーとなり、Jリーグ時代につながる「サッカーという文化の考え方」を説いてきた。

学校と企業に依存していた日本のスポーツを「クラブ化」することのメリットを訴え、自ら読売サッカークラブの創設(1969年)に尽力。アマチュアリズム至上主義の不合理性に目をつけ、プロフェッショナルとアマチュアが健全な形で共存することがサッカーという競技のあるべき姿であることを主張し続けた。

海外サッカーの情報がほとんどなかった1958年にワールドカップを新聞で紹介し、1970年メキシコ大会以来11大会連続して現地取材。1970年大会を題材とした日本で初めてのワールドカップに関する書籍『サッカー 世界のプレー』(講談社)をまとめてワールドカップに関する知識を広めるとともに、70年代から繰り返しワールドカップ日本開催の夢を語ってきた。

メディア人として後生に記録を残すことの重要性を意識し、1965年の1シーズン目からの「日本サッカーリーグ年鑑」の発行を強く推進。また、現在日本のサッカーで広く使われている「試合記録用紙」の開発は、地味ながら忘れてはならない重要な業績と言える。

新聞社退職後には、「ビバ！サッカー研究会」「日本サッカー史研究会」を主宰し、広く一般のファンの参加を求めてサッカー知識の普及に努めている。

